麻ノ谷（まのたに）２・３号墳　現地説明会資料

平成 27 年 7 月 18 日
御所市教育委員会

１．はじめに

麻ノ谷古墳群は、御所市戸毛にある古墳群の１つで、北流する曽我川の右岸、南東から伸びる尾根上に築かれています。古墳群は４基で構成され、最高所に立地する麻ノ谷１号墳は、昭和 55 年（1980）に道路建設に先だって発掘調査が行われ、６世紀前葉に築造された南側に方形張出部をもつ径 20 mの円墳であることがわかりました。

麻ノ谷２・３・４号墳については、分布調査によってその存在が認識されていましたが、発掘調査が行われたことはなく、実際に古墳であるかどうかも定かではありませんでした。そういった中で今回、民間開発（採土）に先だって、麻ノ谷２・３号墳の発掘調査を行う運びとなりました。

２．調査の成果

調査の結果、２基の古墳はそれぞれ周溝をもつ円墳であることが明らかとなり、墳頂部において、棺材は残っていなかったものの、それぞれ木棺直葬の埋葬施設が２基確認できました。

（1）２号墳

径約 13 m、残存高１mの円墳で、墳丘の南側に幅２～４mの周溝が掘られていました。周溝は墳丘を完周せず、南側にのみ存在しています。墳丘の上部は削平を受けているようで、古墳に伴う盛土は確認できませんでした。墳頂部を中心に撹乱土や流土から、須恵器や土師器といった土器が出土しています。

墳頂では、尾根の稜線に直交する方向の２基の埋葬施設を確認しました。**北側の埋葬施設**は、長さ 3.3 m、幅 1.7 m、深さ 70cm 弱の穴の中に、長さ 2.3 m、幅 60cm の箱形木棺が納められていました。棺内に副葬品は認められませんでしたが、東寄りの部分から人間の頭骨と思われる骨片と数点の歯が出土しており、東側に頭を向けて葬られたと考えられます。

南側の埋葬施設は、長さ 3.8 m、幅 1.5 m、深さ 80cm 弱の穴の中に、長さ 3.0 m、幅 60cm の割竹形木棺が納められていました。しかし、東側の木口部は樹木の根によって大きく荒らされており、形を留めていませんでした。棺内では東半で鉄鏃数点、西半で鉄鎌１点以上を検出しました。また、東木口の撹乱内からは鉄鏃が４点以上出土しています。これら遺物は元々棺の中に入れられていた可能性もありますが、出土した高さに差があることから、棺の上に置かれていたものが棺の腐朽とともに落ち込んだものであると判断できます。また、棺の東寄り部分から人間の頭骨と思われる骨片が出土しており、北埋葬と同じく東側に頭を向けて葬られたと考えられます。

さらに南埋葬については、埋葬に伴って**須恵器を破砕**していることが土器の出土状態から明らかとなりました。当時の葬送儀礼の一端を窺うことのできる成果といえます。

これら２つの埋葬施設には切り合いがなく、北埋葬からは出土遺物もなかったため、どちらが先につくられたものかは明確にできません。ただし、２つの埋葬施設が墳頂に整然と並列していること、南埋葬が北埋葬に比べて大きさや棺の種類、出土遺物の内容で優れていることから、ほぼ同時期の埋葬で南埋葬がやや先行してつくられたと考えられます。

（2）３号墳

径 10 m弱、残存高 1.5 mの円墳で、墳丘の南側に幅 1.5 mの周溝が掘られていました。周溝は墳丘を完周せず、南側にのみ存在しています。墳丘の上部は削平を受けているようで、古墳に伴う盛土は確認できませんでした。墳頂部を中心に撹乱土や流土から、須恵器や土師器といった土器が出土しています。

墳頂では、尾根の稜線に直交する方向の２基の埋葬施設を確認しました。**北側の埋葬施設**は、長さ 4.1 m、幅 1.7 m、深さ 80cm 弱の穴の中に、長さ 2.8 m、幅 80cm の箱形木棺が納められていました。棺内では、東木口付近で鉄鏃９点、鉄鎌１点、西半で鉄鏃１点を検出しました。これらは刃部の方向にまとまりがなく、出土した高さにも差があることから、棺の上に置かれていたものが棺の腐朽とともに落ち込んだものと判断できます。また、棺の東寄り部分から人間の頭骨と思われる骨片が出土しており、遺物の出土状態と合わせて考えると、東側に頭を向けて葬られたと考えられます。

南側の埋葬施設は、長さ 3.6 m、幅 1.4 m、深さ 80cm 弱の穴の中に、長さ 2.5 m、幅 70cm の箱形木棺が納められていました。棺内で検出した遺物は、西半の鉄鏃１点のみで、棺の東寄り部分から人間の頭骨と思われる骨片が出土しました。北埋葬と同じく、東側に頭を向けて葬られたと考えられます。

これら２つの埋葬施設は、南埋葬が北埋葬の南東隅をわずかに掘り込んでつくられているため、北埋葬が先につくられといえますが、切り合いがあるとはいえ、ほぼ墳頂部に並列していること、出土遺物に明確な時期差が見いだせないことから、大きな間隔を空けることなく、南埋葬もつくられたと考えられます。

これら２基の古墳がつくられた時期を確定する資料はそれほど多くありませんが、墳頂から出土している須恵器や埋葬施設から出土した鉄器などから、両墳とも概ね**６世紀前半～中頃**につくられ、２号墳が３号墳に先行して築造されたと考えられます。

（3）古墳に伴わない遺構

２号墳南埋葬の２m南側で、**中世の土坑**を１基検出しました。土坑を埋めた土の中から、完形の土師皿１点が出土しています。地鎮などに伴う遺構の可能性も考えられますが、性格は判然としません。

２号墳周溝の南側で、土坑を１基検出しましたが、出土遺物がないため、性格・時期ともに不明です。

３．まとめ

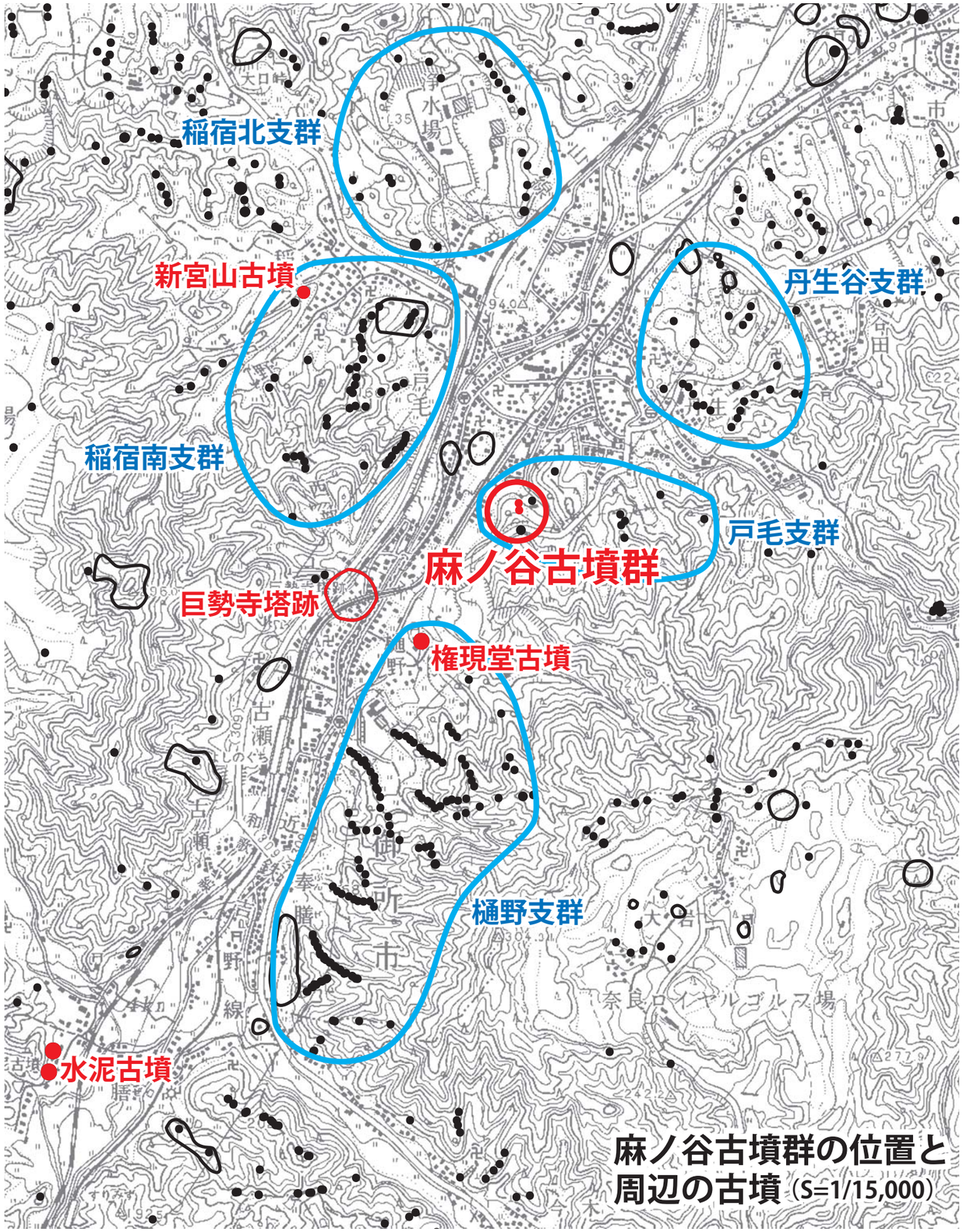
今回の発掘調査により、麻ノ谷古墳群の具体的な様相が明らかになってきました。麻ノ谷古墳群は、群中最大の径 20 mの１号墳が６世紀前葉に尾根最高位の場所に築造され、その後６世紀中頃までの間に２号墳→３号墳の順に墳丘規模を縮小させながら、尾根の先端に向かって古墳を築造していったようです。

検出した埋葬施設は、４基とも副葬品が少なく、確認できたものも鉄器のみで土器の副葬が認められませんでした。こういった副葬品の少ない有り様は、巨勢谷内の他の群集墳にも共通する特徴です。また、いずれの埋葬も頭位を東に向けているという共通点がありました。尾根の稜線上に作られている古墳ですので、埋葬頭位についてもその地形の制約を受けている可能性は考えられますが、古墳群中で頭位にまとまりが認められる点は、古墳をつくった人たちの何らかの意図が含まれているとみられます。

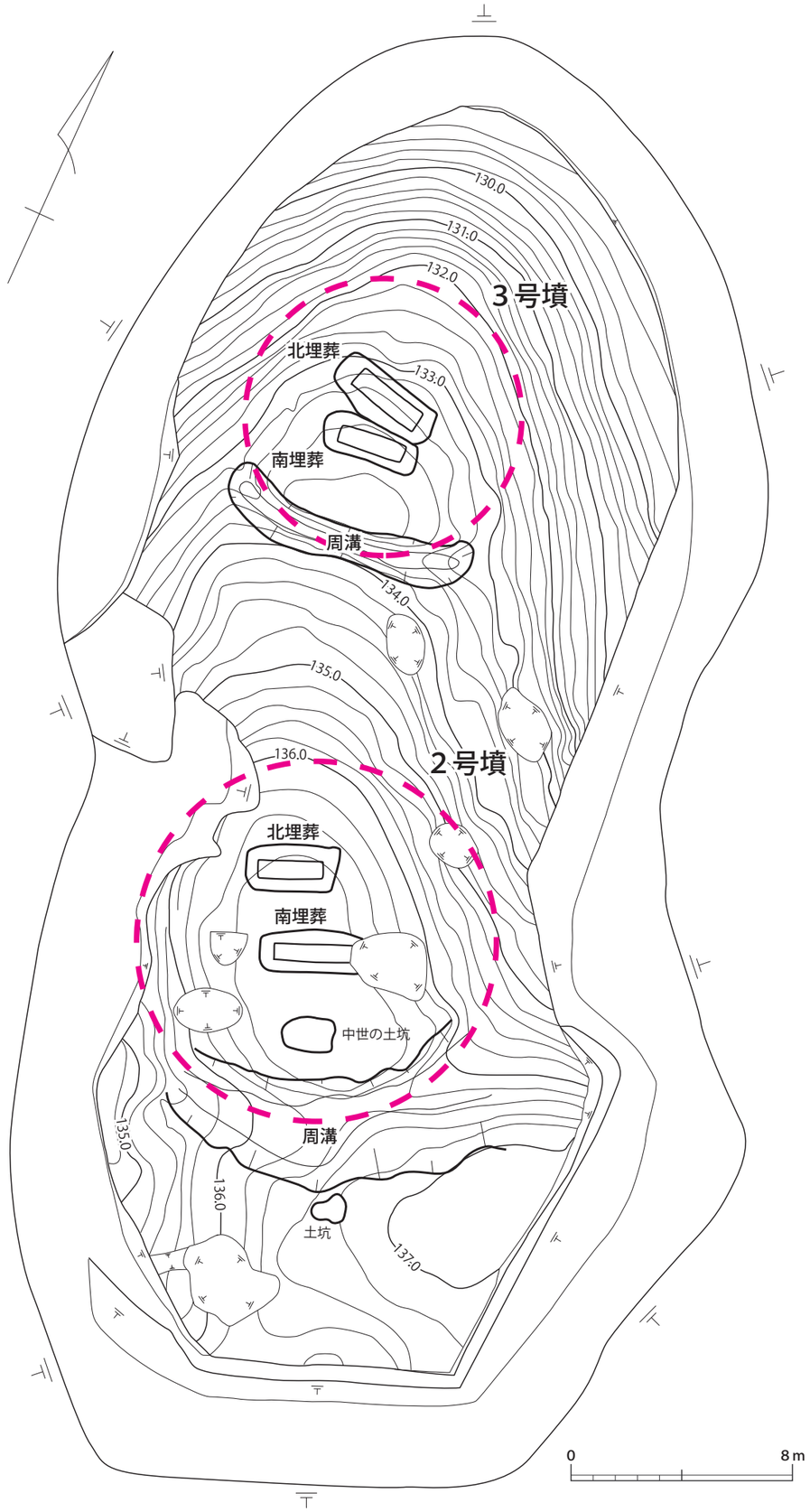
曽我川両岸の尾根上には多くの古墳が築造されていますが、その中には、大規模な横穴式石室に家形石棺をもつ古墳も含まれており（権現堂古墳、新宮山古墳、水泥塚穴古墳、水泥南古墳）、それらの古墳は有力氏族であった巨勢氏の盟主の墓であると考えられています。麻ノ谷古墳群をはじめとした小規模な古墳については、そういった盟主を支えていた中小首長の墓であるといえるでしょう。

しかし、麻ノ谷古墳群のように発掘調査が行われている古墳は全体からみると非常に少なく、上記のような古墳群のあり方が他の尾根上の古墳群にも共通することであるのか、麻ノ谷古墳群に限られることであるのかは俄に判断できません。今後このような調査成果を蓄積していくことで、巨勢谷における中小首長の動向がさらに明らかになっていくことが期待できます。

↓↓市内の文化財情報を発信しています↓↓
御所市教育委員会文化財課 HP：http://archaeology.ec-net.jp/



麻ノ谷古墳群の位置と
周辺の古墳（S=1/15,000）



麻ノ谷２・３号墳　墳丘測量図（S.＝1/200）